

混合受け入れ方式による帰国生徒教育の実践報告（2008年度）

松津 英恵 居城 勝彦 田中 義久 原 信一

帰国生徒委員会

要約

本校では1976年度より帰国生徒の受け入れを開始し、2008年度に最後の帰国生徒の入学生を迎えた。本稿では、今年度の帰国生徒委員会での実践内容を中心に考察しているが、昨年度研究紀要でまとめた学習面での適応の内容を踏まえ、生活面での適応状況を研究テーマとし、過年度在籍した帰国生徒を対象に行われたアンケートを資料にして分析し、まとめた。

I 本校の帰国生徒教育の経緯

一般的に帰国生徒教育は、当初、帰国生徒個人に対する日本社会への適応指導が中心であったが、次第に帰国生としての特性伸長を重視するようになった。さらに80年代後半以降は、一般生徒との相互交流・相互啓発をも視野に入れた実践に発展し、国際理解教育の一環としての位置づけも意識されてきた。最近では、国際教育のなかでも、日本語を十分に習得していない外国人児童生徒教育にも重点が置かれつつある。また、1990年以降にアジア諸国からの帰国生徒の数が増えたこともこの30余年の間に見られた大きな変化であった。

この間に、帰国生徒を取り巻く環境は大きく変化した。それに応じ、本校での帰国生徒教育の取り組みや、入試制度・方法、また研究の視点も多様化してきた。

これまで、本校では附属小学校出身者と一般枠による入学者と同じ学級で同じ学校生活を送ることで、相互啓発を期待し、混合受け入れ方式を採用してきた。この点は本校での帰国生徒教育の大きな特徴であると言える。

本校では、1976年4月より、帰国生徒の募集を開始し、2008年度で33年目を迎える。そして今年度入学の62期生をもって、帰国生徒募集は終了することになった。

II 本校の帰国生徒教育の特色

1 本校の求める帰国生徒像

本校が帰国生徒を受け入れるにあたって、重視していることは、次の2点である。

- ① 海外での学校生活に前向きに取り組んだ。
- ② 海外の生活や状況を、自分なりの見方で把握している。

2 混合受け入れ方式の意義

既に述べたように、本校では、帰国生徒だけのクラスを編成し、帰国生徒対象の授業を行う特別な指導はせず、一般生徒と同じ教育を受ける「混合受け入れ方式」による帰国生徒教育を行っている。

その意義は、帰国生徒の海外での生活経験を、他の生徒たちとの相互交流・相互啓発を進めることによって生かしていくことができる点にある。各学年に15名在籍し、異なる海外生活経験を持った帰国生徒達が、他の生徒にとっても視野を広げる機会を提供している。帰国生徒にとっても、帰国生徒以外の生徒とも学校生活を過ごすことで、日本での中学校生活に早く慣れることができるようになる。

帰国生徒のための特別な指導を行わないということは、帰国生徒にとっては、入学後に自分で学習をすすめなければならないことになる。しかし彼らが海外の小学校で受けた教育内容は日本の小学校課程での学習内容と重なる部分もあるが、必ずしも同一ではない。そのため、入学直後から夏休み前の1年1学期までは帰国生徒委員会教員による面談、学力診断テストや教科担当者によるアドバイス、2回の保護者会など、新しい環境や学校生活への適応のためのサポートを、学級担任と連絡をとりながら行っ

ている。1年2学期以降は、面談や保護者会などの特別な指導は行わず、直接的には他の生徒と同様の指導を行っていくが、担任および教科担当者を中心に、教員間で該当生徒たちについての情報交換をできるだけこまめに行うようにしている。特に学習状況については2～3年かかって小学校課程での埋め合わせをしていくという前提の下、注意深く経過を観察するようにしている。

3 帰国生徒の生活面での適応

昨年度は、本校での帰国生徒の学習面での適応についてまとめた。今年度は本校の33年間の帰国生徒教育を振り返る1つの視点として、生活面での適応についてまとめたい。

過去の研究実績として、1978年度の研究紀要では生活適応の状況を分析する着眼点として、①身体的適応②心理的適応（情緒や行動などから判断できること）③社会的適応④学習適応（未学習の部分が解決できたか、授業内容がわかるかなどのこと）の4つの点から分析をしている。

今回の調査の方法として、これまでに帰国生徒を対象に行ったアンケートによる調査をもとに、生徒や保護者からあげられた生活面での適応に関する記述を集め、それらをもとに生活面での適応について考察を加えた。アンケート実施時期としては、毎年ではないが、これまでの帰国生徒担当者が行ってきた、1年入学直後、1年1学期末、1年3学期末、3年卒業前の時期の4つとした。そのうち1年入学直後の時期のものは、電車通学や、荷物の大きさや重さ、またクラス集団の中で人間関係を作れるかということへの不安など、一般枠からの入学者にもあてはまる項目も多いので、それ以外の3つの各時期に挙がってきた項目を、1978年度の研究紀要での分類を参考に、①身体面での適応（体調・疲労感、通学の負担などから判断できること）②学校生活への適応（学校の時程や雰囲気慣れることや友人関係などから判断できること）③日常生活への適応（日本の中学生が常識として身につけている知識がないために支障があったと判断されること）に着目して分析した。教科の学習等については昨年の紀要で触

れていることと、帰国生徒委員の教員、および担任による面接では、適応していく過程で受けるストレス等は把握しているが、心理的、また情緒的なところ極端に不安定な状態との報告も見られなかったもので、今回は3つの点を中心にしぼることにした。

本校が帰国生徒を募集し、調査研究を行ってきた33年間で、帰国生徒を取り巻く環境や、社会的背景は大きく変化し、それに伴い本校の帰国生徒入試の選抜方法や応募資格などの制度も何度も見直された。従って、帰国生徒受け入れ開始時の頃のデータと比較的最近のデータを同じように扱うことに無理があるところもあるが、取り上げたデータからわかることをまとめていきたい。

1年1学期末、1年3学期末は54期（2003年卒業）55期（2004年卒業）3年卒業時は52期（2001年卒業）53期（2002年卒業）で実施したアンケートを資料としている。実施してから数年経過した資料になるが、1年学期末、3学期末、3年卒業時でできるだけ資料が揃い、かつ比較的在学した時期の近い学年から抽出するという条件からこれらの学年の資料を使用した。→資料A

(1) 1年1学期末

入学して3ヶ月余りが過ぎ、学校の様子がわかり始めた頃である。新しい環境への適応の障害となっていると思われる記述を拾い、表のようにまとめたが、これら以外にも学校生活全般で感じていることに、授業・部活で忙しくなったが楽しいなどの記述も見られた。1年1学期入学直後は、通学時の駅や電車の混雑や、カバンや荷物の重さなどが目立ったが、入学して学校生活を経験するうちに、周りの友人の話す話題や言葉がわからないことがあったり、自分の意見をストレートに言ってトラブルになってしまったことなど、日本の中学生特有の文化を知らないことからぶつかる壁や、姓で指名されたり、大人数の集団で授業を受けるなど、日本の学校文化に対する違和感などが、帰国生徒として乗り越えなければいけない障害として現れるようになると言える。この時期にテレビを見る時間が長くなったという、どちらかという弊害となるようなことも保護者の回答から挙げられているが、子どもにとっては、テ

レビを通して知識を得て、周りの生徒達の世界に少しでも近づこうと努力しているその姿なのかもしれない。

(2) 1年3学期末

1年間の学校生活を振り返って、入学後に感じていた壁をどのように乗り越えたかということであるが、身体面での適応については記述が見られない。1学期までは、体格・体力的な点からも小学生とほとんど変わらない状況から、夏休みを過ぎ、成長期を迎えた生徒、また部活動等で体力をつけた生徒も多く、満員電車での通学は彼らが耐えうるだけのものとなったのであろう。また1年間東京またその周辺で生活することで、電車やバスなどの交通網に慣れたことも大きいはずである。

学校生活への適応に関しては、やはり学校でのクラス集団の規模や間食の時間がないことなど、学校の制度の違いから来るもの、また子ども同士の間関係の取り方の違いから来ているものなどもこの時期に見られ、「相手に譲ることで衝突を避けたり、仲直りした」などの内容もあり、適応していかなければならない子どもにするとストレスになることも多い。これらのことを子ども同士で解決させることは、大切なことでもあるが、場合によっては深刻化する可能性もあるので、教師側の十分なケアが必要でもある。

日常生活への適応については、解決するためにひたすら友人に聞く、自然に慣れていくという内容が多いが、1年3学期末の時点でやはり解決はしていないことも多いと言える。教科の学習とは異なるが、生徒本人達が知識を習得するために友達に聞くなどの努力を要求されていることがわかる。

(3) 3年卒業前

帰国生徒として入学した生徒が、3年間を振り返

って、自分が苦労したことを書き出しているが、身体面での適応で、ここで再び通学のことを挙げられている。1年のうちにほぼ解決されていると考えられるが、入学したてのまだ体力もない頃に、大人でも耐え難い満員電車での通学は本人達にも忘れられない苦労話なのであろう。

学校生活への適応では、日本の学校での習慣（外履き上履きの区別など）は慣れることで解消されるが、友人関係の持ち方や友達との接し方は、苦労したことも伺える。帰国生徒の場合、「ストレートに言ってしまい、友達とぶつかってしまった。」ということはよくあるようであるが、最近の生徒達では友達関係をうまく作れない生徒も多くなっているようで、帰国生徒の指導に限らず、今後の生徒指導の課題の一つでもあると言える。

日常生活への適応については、多くのことが3年間で解決していることが伺える。卒業生や保護者の話の中で、「高校生になるまで日本の中学生が知っているようなことを知らなかった」という話が出てくるともあり、もちろん中学3年が修了した段階で、すべて解決ということでもないが、中学1年のころに、「友達の間で話題になっていることがわからない、言葉がわからない」などの状態に比べれば、この点でのストレスはほとんどなくなっていると言える。

ここで挙げてきた学校生活への適応のなかの、友人関係、また日常生活への適応については、混合受け入れ方式の環境であるが故に帰国生徒が乗り越えなければいけない課題でもあったということは否定できない。しかし、3年間本校の帰国生徒以外の生徒達と共に過ごす中で、苦労を乗り越えながらも、適応し、他の生徒達に与えた影響も大きかったと言える。

資料A

1年1学期末

本校での生活に対するとまどいや悩み、海外生活との違いにより困っていること、または学校生活全般で感じたり、考えたりしていることを書いてください。

54期

生徒の回答	保護者の回答
(身体面での適応) ・通学に不安や疲れを感じる ・重い荷物で疲れる	左に挙げた他 ・電車通学が辛い ・気候の違いに体が慣れない ・正座をしてもらえない
(学校生活への適応) ・友人関係に不安がある ・時間にゆとりがない ・休み時間が短く、遊べない	左に挙げた他 ・自分で考えて行動することが遅れている ・目立ちたくなくて、周りを見て行動するようになった ・帰国後しばらくはテレビを見る時間が長い
(日常生活への適応) ・先生の話の内容が理解できないことがある	・難しい言葉や熟語がわからない

55期

生徒の回答	保護者の回答
(身体面での適応) ・寝不足で少し辛い ・電車のラッシュで疲れる／体が触れていやだ	左に挙げた他 ・荷物が持ちにくく、重くて疲れる
(学校生活への適応) ・女子の友達はあるが、男子と話せない(女子) ・内部生と考え方が違う ・海外では学校の清掃がなく、うまくできない	左に挙げた他 ・意見をストレートに言うことで、相手に不快な思いをさせてしまった ・多人数の授業に集中できない／私語が気になる ・名前ではなく姓で呼ばれることに違和感がある
(日常生活への適応) ・先生の話の内容が理解できないことがある ・言葉や習慣が違う	

1年3学期末

質問：学校生活で、帰国生徒として困ったことをあげて、それをどのように解決したか書いてください。(ここでは学校生活の中でも、どちらかという教科の学習のことであると判断した項目は除いて取り上げている。)

54期

困ったこと	解決法
(身体面での適応) 特になし	
(学校生活への適応) ・友達関係で少し困った	友達にいろいろゆずったりして仲直りした

<ul style="list-style-type: none"> ・通学で電車で1人で乗ること 	電車に慣れる
<ul style="list-style-type: none"> ・昔から友達を作るのが苦手で、積極的でなかったため、おとなしいと見られるのがいやだった 	昔の自分を知っている人はいないので、新しい自分に変える努力をした
(日常生活への適応)	
<ul style="list-style-type: none"> ・小学校でみんながしたことがわからなかった 	みんなに聞いた
<ul style="list-style-type: none"> ・友達が使っている熟語などの日本語がわからない 	特に何もしていない
<ul style="list-style-type: none"> ・友達との会話で、わからない言葉や聞いたことがないものがあったりする 	その場で聞くしかない

55期

困ったこと	解決法
(身体面での適応) 特になし	
(学校生活への適応)	
<ul style="list-style-type: none"> ・初めは電車通学 	少し余裕を持って家を出た。慣れるために電車を使って一人でいろいろなところへ出かけた
<ul style="list-style-type: none"> ・間食ができなかったこと 	朝食をたくさん食べた
<ul style="list-style-type: none"> ・入学当初はいじめなどがすごくこわく、友達ができるか不安だった 	なるべく皆で行く遊び(映画、遊園地など)には、積極的に参加し、時がたつにつれて、自然にとけ込めるようになった
<ul style="list-style-type: none"> ・今まで人数の少ないクラスだったので、42人のクラスでは、どうやってつきあうか戸惑った 	まずは帰国生徒同士仲良くなって、それから他の人とよく(仲良く)話すようになった
<ul style="list-style-type: none"> ・むこう(在留先)と違う「友達との接し方」によってできたトラブルとか誤解 	1年間、これはもう慣れだと、できるだけなじめるように、誤解がないように行動した
<ul style="list-style-type: none"> ・むこう(在留先)とちがういろいろな面での「やり方」や話の話題など 	ただただもう友達に聞きまくった
(日常生活への適応)	
<ul style="list-style-type: none"> ・小学校でみんながしたことがわからなかった 	みんなに聞いた
<ul style="list-style-type: none"> ・友達が使っている熟語などの日本語がわからない 	特に何もしていない
<ul style="list-style-type: none"> ・友達との会話で、わからない言葉や聞いたことがないものがあったりする 	その場で聞くしかない
<ul style="list-style-type: none"> ・周りが話していることがわからない 	仲良くしていくうちに慣れていった
<ul style="list-style-type: none"> ・友達と話していて、意味のわからない言葉がたまにあった 	後から調べたり、人に聞いたりしたが、解決はしなかったときも多かった
<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろあるけれども、解決はほとんどできていない 	

3年卒業時

質問：3年間の学校生活で、帰国生徒として困ったことをあげて、それをどう解決したかを書いてください。

(52期)

困ったこと	解決法
(身体面での適応) ・電車通学で、人混みや乗り換えに苦労した ・都会の環境に慣れるのに苦労した	ラッシュアワーを避け、駅を確認することで慣れたが、使いこなすことはできなかった 朝早い、人の移動の少ない時間に移動して道を覚えるようにした
(学校生活への適応) ・上履きに履き替える日本の学校特有の習慣に戸惑った ・多人数の環境に慣れるまで、友達作りに苦労した ・日本では仲のよい友達同士は常に一緒に行動することが求められ、ストレスを感じた ・在留地が英語圏ではないので英語が話せないというコンプレックスがあった	すぐに慣れた 友達にもできるだけ話しかけるようにした 自分は「個人主義」なので基本的には解決していないが納得できる範囲で合わせるようにした 解決ではないが、帰国生徒が英語を話せるとは限らないこともわかって欲しかった
(日常生活への適応) ・日本にいれば誰もが知っている常識を知らない (修学旅行に行くとき、シャンプーやバスタオルなどが必要だということやお金をどのくらい持っていくものかなど)	友達などからいろいろ学び自然に解決されていた

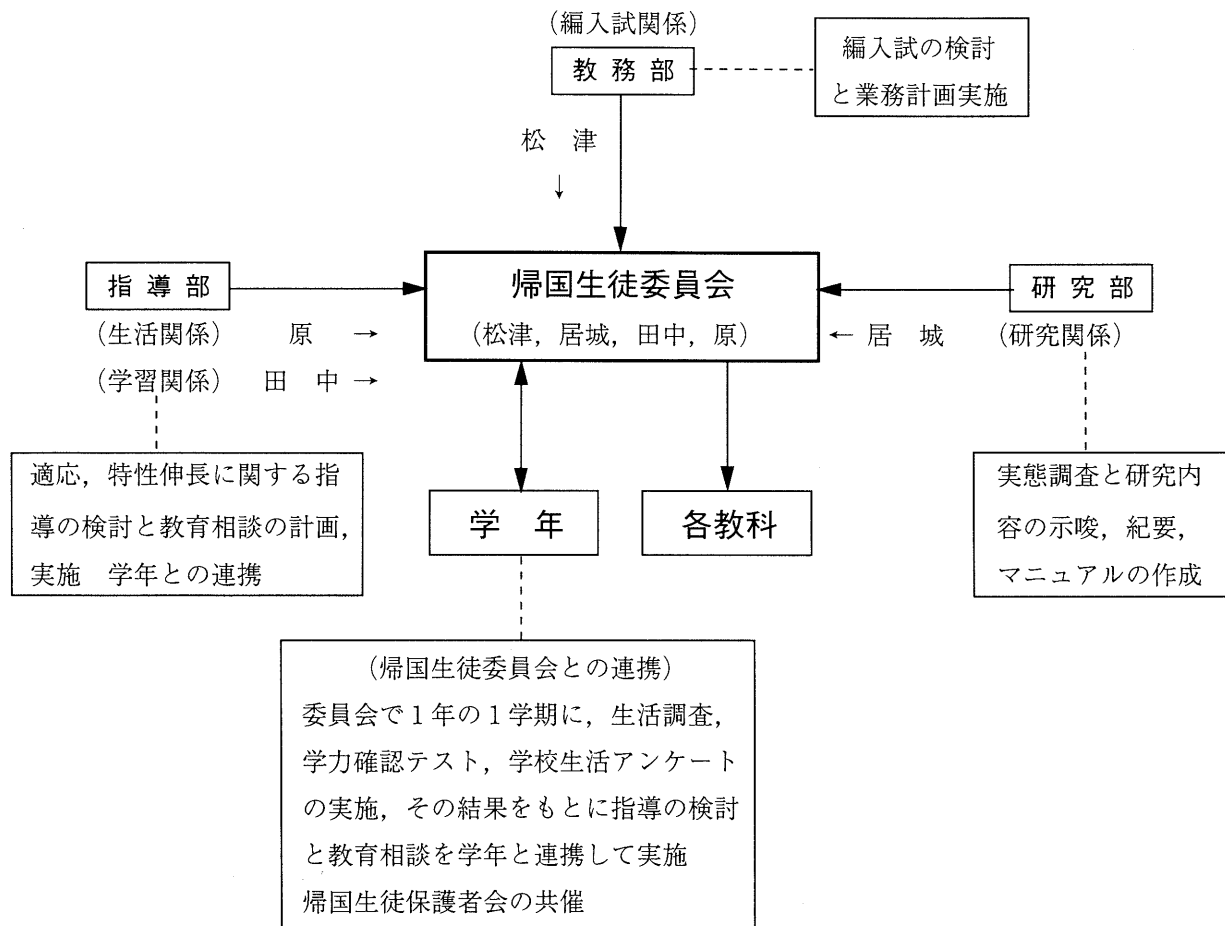
(53期)

困ったこと	解決法
(身体面での適応) ・電車通学になかなか慣れなかった ・在留地ではバス通学だったので、駅から学校まで歩くのが大変だった	自然に慣れた
(学校生活への適応) ・日本の学校と外国の学校のあまりの違いに戸惑った ・4歳までしか日本にいなかったため、他の生徒と感覚がずれているという思いがずっとあった	特に何もしなかったが慣れた みんなが考えていることを自分なりに解釈してみると、意外とみんなと深くつきあえるようになった
(日常生活への適応) ・帰国した直後で、知らないことが多く、みんなの話していることがわからないときがあり、話をしづらかった ・土地勘がないため、友人の会話で地名が出ててもかわからない ・日本語が聞き取りづらく、理解がしにくかった ・努力はしなかったが、自然に聞き取れるようになった	友人に説明してもらったり、地図を見たりした 自然に聞き取れるようになった 後で先生に聞き直した

IV 本校の帰国生徒教育体制

2008年度

竹早中学校の帰国生徒教育の組織図



1 編入試関係

教務部	帰国生徒委員会
<ul style="list-style-type: none"> 面接実施要領(業務関係)の作成 面接担当者事前打ち合わせ 判定会議後の関係書類の整理 編入学者資料作成(新2年主任へ) (願書, 身上書) 健康診断用紙を編入学者へ配布 	<ul style="list-style-type: none"> 編入試内容, 要項, 書類の見直しと提案 編入試験願書の受け取りと処理 面接資料および得点原簿の作成 判定会議資料作成と合格発表準備 編入試の広報 (文科省, 外務省, 財団, フレンズ, 塾等からの入試アンケートに回答) 卒業時の進学先と資料整理

2 生活関係

(1) アンケートの実施

アンケートの対象は、学年に在籍している帰国生徒とその保護者である。その回答については、学年、養護教諭と連絡をとり、状況に応じて学級担任、委員会の担当者が指導に当たる。

① 1年 入学時(4月)

海外経験の内容や中学校の生活への要望・不安などを把握することと、早期に行うことで、混合受け入れ方式の環境への適応を支援することを目的としているので、入学後のオリエンテーション期間中に実施する。

② 1年1学期末(7月)

5月に宿泊行事を体験した上で、友人関係を中心とした学校生活について、また定期考査も2回受けたことから授業を中心とした学習についての状況等を把握する。

③ 3年 卒業時(卒業年3月)

中学校3年間を終えてみて、海外在留時との比較の上での自己の変容や活かされてきたこと等の内容を把握する。

(2) 教育相談の実施

2(1)①のアンケート回答をふまえて、委員会担当者によって個人面談が実施される。ただし生徒の状況に応じて、担当者だけではなく、学年及び学級担任が適宜面談を行う。これは、学校生活や学級生活への適応がスムーズに行えるようにすると共に、特性の保持・伸長への指導も心がけ、生徒の不安を取り除くことを目的としている。

① 入学時(4月)

アンケート回答の内容を話題の切り口として、3(1)の結果助言も含めて、生活学習についての不安に早期に対処する目的で実施する。

② 1年1学期中間考査前(5月上旬～月末)

→担任による「面談期間」

中学校入学後に、一ヶ月弱経過し、学習面における状況と、あわせて生活面について、また友人関係等についての不安や悩みを担任が把握する。

③ その他

①②の機会以外でも、必要に応じて、担任または

帰国生徒担当者が、面談を行い、学習・生活状況を把握する。

(3) 帰国生徒の保護者会の開催

1年の1学期に2回、一般保護者会の前に開催する。いずれも運営と開催の日時は学年と相談する。当日は学年も同席し、委員会の担当者が中心となって進行する。

① 入学時(4月中旬)

アンケート回答と個人面談を踏まえた上での説明及び質疑応答を行う。全体会の後で、話しやすいようにグループ形式の懇談会の時間を設けることもある。

② 1年1学期末(7月)

帰国生徒の卒業生保護者2名による体験談と質疑応答を行う。また、参考として前年度卒業時アンケート結果を示す。

3 学習関係

(1) 入学時学力診断テストの実施

入学後からオリエンテーション期間中に、新1年生向けの学力診断テスト(国語・算数・理科・社会の4教科)を、家庭学習として行う。このテストは、今後の学習指導のひとつの目安とするために実施するのであって、成績には関係ないものであるという趣旨を生徒と保護者に伝えた上で実施する。採点は、該当教科の担当者に依頼し、学力に対してのコメントを聞く。このコメントを指導の参考とし、面接等でアドバイスをを行う。

(2) 学習適応のための相談の計画・運営

3(1)の学力診断テストの結果、授業、定期考査の結果により、必要に応じて今後の学習補充の方針を検討する。

① 委員会の担当者が連絡・調整役となり、学習補充やガイダンスを必要とする教科の担当者と連絡をとる。

② 学習内容・方法(家庭学習課題を含む)や学習相談の日時を生徒個々にアドバイスし、その状況を学年、学級担任にも連絡する。

③ 今後の学習のあり方について、学級担任と生徒、あるいは保護者の面談の他に、4月の帰国生徒保護者会で、委員会の担当者が概要と指導の方向性

について話をする。以後、学年と相談しながら進めていく。

4 研究関係

(1) アンケートの分析

回答内容の集計・分析は委員会で行う。その結果を帰国生徒保護者へも示すとともに、学年、養護教諭と連絡をとり、状況に応じて学級担任、あるいは委員会の担当者が指導にあたる。

また、分析結果はデータとして蓄積し、次年度以降への参考資料としても活用する。

(2) 生徒の地域別特性(生活・学習)を踏まえた研究

生活・学習両面から3年間を見通したなかで、以下の教育における地域別特性を踏まえての追跡調査を行う。

- ① 適応教育
- ② 特性の保持・伸長教育

(5) 学年との連絡

③ 一般生徒と帰国生徒同士の相互啓発教育

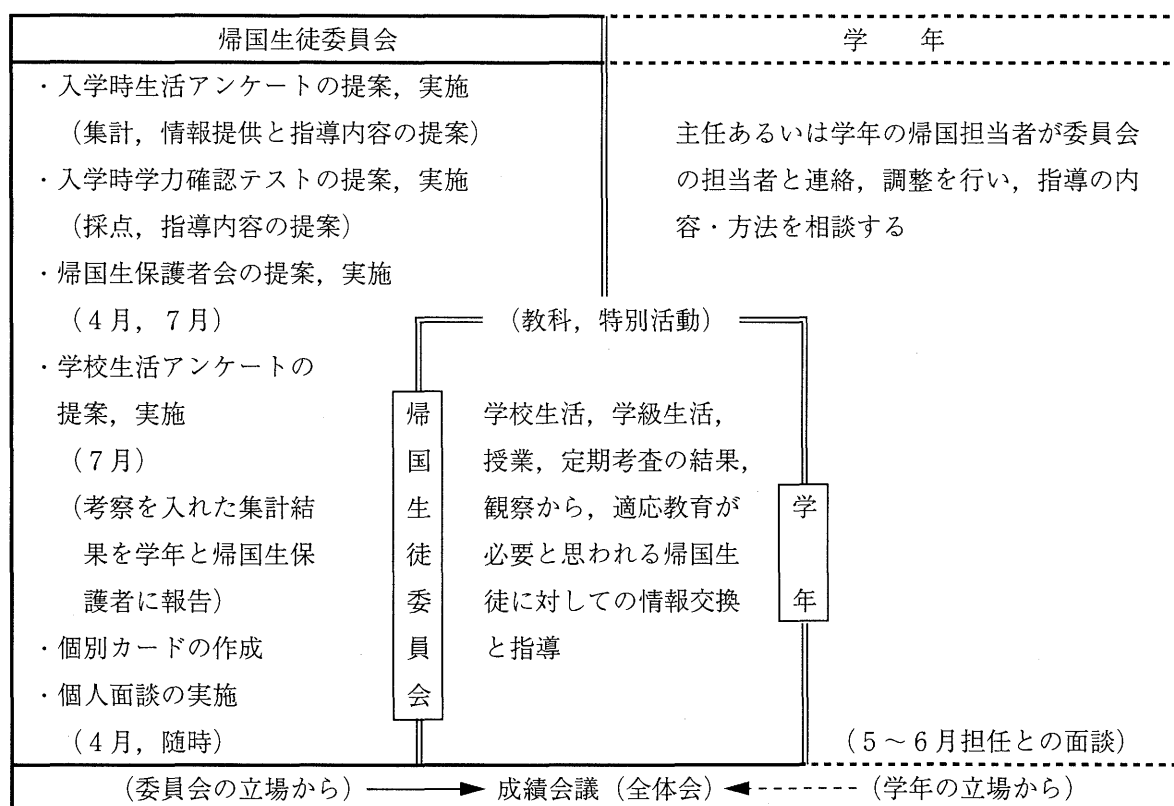
④ 国際理解教育

(3) 「混合受け入れ方式による帰国生徒指導：竹早マニュアル」の検討

4 (1), (2)の取り組みやそのために使用した資料、プリントなどを記録として蓄積することと、本校の帰国生徒教育のベースとなっている過去28年間の帰国生徒教育の実績を踏まえた取り組みの状況と成果を、混合受け入れ方式をとる学校に対して参考となる指導マニュアルとして作成されたものが「竹早マニュアル」である。このマニュアルの更新を行っている。また、過去の本校の帰国生徒教育に関する研究紀要の整理もあわせて行っている。

(4) 帰国生徒指導に関する協議会の開催

帰国生徒指導に関して課題が生じた時点で、必要に応じて委員会の担当者が協議会を開催する。



V 本年度実践内容

本年度行った主な業務を月別にならべてみると次の通りであり、○番号のついている項目の内容の詳細は、あとに述べる。

細は、あとに述べる。

< 4月 >

- 1 2008年度在籍帰国生徒一覧表作成
- 2 入学時アンケートの実施と集計 → ①と資料1

3 個人面談 →③

4 第1回第1学年帰国生保護者会実施
→④と資料3

5 入学時学力診断テストの実施，各教科担当からのコメントを併せて，生徒・担任への報告→②

6 帰国卒業生保護者候補検討

<5月>

7 入学時学力診断テストの返却

8 昨年度検討事項の確認と本年度検討事項の整理

9 研究テーマの検討（個人別の追跡調査を基にした適応指導のあり方）

10 第2回保護者会に向けての準備（帰国卒業生保護者への連絡）

<6月>

11 1学期末アンケートの検討と作成

<7月>

12 第2回第1学年帰国生保護者会実施
→⑤と資料4

13 第1学年1学期末アンケートの依頼

<8月>

14 1学期末アンケートの集計と分析
→⑥と資料2

<9月>

15 1学期末アンケートの集計と分析・考察

<10月>

16 紀要執筆内容の検討

<11月>

17 お茶の水女子大学附属中学校
「第6回帰国子女教育研究協議会」に参加

18 紀要原稿の執筆分担

<12月>

22 紀要原稿の作成

23 編入試実施検討

<1月>

24 紀要原稿作成・推敲

<2月>

25 紀要原稿最終チェック

<3月>

26 卒業時アンケートの検討と実施

27 1年生学年末アンケートの検討と実施

28 竹早マニュアルの修正 →資料5

29 卒業生の進路表作成

<随時>

30 塾など帰国編入試に関する問い合わせへの対応
（郵便物・FAX）

31 帰国生徒関係各種団体からの問い合わせへの対応
（郵便物・FAX）

32 本校編入学希望者の問い合わせへの対応
（電話・FAX）

① 入学時アンケート

これは，入学式直後のオリエンテーション中に実施し，学校生活への不安や心配を問うものである。

1年生の帰国生徒および保護者15組から回答を得られたが，生徒の半数以上，保護者の約3分の1が「特になし」と答えている。残りの生徒の不安は，生活面では学校生活についての情報が早く欲しい気持ちのものや電車通学のことなどがあり，深刻化する可能性は低い，慣れるまではケアが必要なものもある。また，帰国スケジュールの都合上，家族が揃わない状態で，新しい学校生活をスタートしなければいけない生徒も時々おり，こちらも注意深く様子を見ながら，声をかけていく必要はある。学習面では，抜け落ちている箇所のことや，他の生徒についていけるか，などの不安である。保護者の心配は，交通機関を使つての通学についてや友人関係について，そして一般枠で入学した生徒達に学習がついていけるかなどである。

② 入学時の学力診断テスト

小学校6年修了程度の基礎的な学力テストを実施し、1年生の各教科担当者からのアドバイスを添付して返却した。各教科の結果であるが、国語に関しては全員の生徒がほぼ問題のないレベルに達していた。社会・数学・理科に関しては、地域によっては小学校であまり深く扱っていない内容などがあり、領域等によって若干差も見られたが、ほとんど心配ない程度のものである。

③ 個人面談

帰国委員の4名が、第1学年の帰国生徒1クラスずつ（3～4人ずつ）担当を決めて面談を行った。担任クラス以外の生徒と面談を行うようにし、（担任は担任としての面談の機会があるので）、一人の生徒を多くの目で見ると、いう形をとっている。

①、②の資料をもとにしつつ、4月末現在の生活や学習の様子を聞いた。全員が「学校生活はとても楽しい」と話し、竹早での生活の第一歩は順調に踏み出せたようであった。学習に関しては、不安を感じている生徒もいるが、授業はわかりやすいと答えており、具体的な悩みは該当教科担当者に連絡・報告し、教科担当者から個別に対応した。

生徒には、「あせらないこと」、「遠慮せずに質問すること」、「復習を大切にすること」、場合によっては、「予習も必要なこと」を基本に指導している。必要に応じて保護者にも状況を説明するが、これは担任を通して連絡することが多い。

④ 第1回第1学年帰国生保護者会

本年度の帰国担当委員の紹介、保護者の自己紹介、本校の帰国生徒指導方針の説明、前述①②③の結果についてとその対応についての話が主な内容である。子どもが学校や生活に慣れるまでは、保護者の不安はどうしても強いので、長い目で落ち着いて見守る姿勢が望ましいことを基本に話しをしたが、親の不安を取り除くのは簡単ではない。その後、クラス別に保護者の懇談を行い、1名ずつ委員がついて（生徒面談で担当したクラスについて）適宜相談に応じる体制をとった。この形は、少人数になるため意見が出しやすく、好評である。

⑤ 第2回保護者会

1学期中の生活・学習状況についての報告を行い、帰国卒業生の保護者2人に竹早中学校在学時代の経験と卒業後の状況・進路などについて話していただいた。（話の内容は、[資料4](#)参照）卒業生保護者の2人については、卒業生が男子生徒と女子生徒、卒業したばかりの学年と大学に進学している学年、進学先の高校などの背景が偏らないような配慮をして依頼した。帰国生徒の状況は一人一人違った環境で育ち、抱える問題も各自異なっており、卒業生の保護者による話と必ずしも一致するわけではないが、参考になることは多く、好評である。長い海外生活を経験した者でないとわからないこともあり、担当の教員が話すよりも、実体験に基づく真実味が感じられ、納得して聞けるようである。

⑥ 第1学年1学期末アンケート

第2回目の保護者会の時にアンケート用紙（生徒と保護者を対象）を配布し、1学期終業式までに記入提出の上で、集計・分析を行った。内容的にも量的にも非常に多くを含んでいることが、資料からわかる。（[資料2](#)参照）毎年、設問を吟味しているため、多少の違いはあるが、生活や学習に関する基本的な質問内容は同じで各年毎の比較ができるようになってきている。その比較の結果は、毎年のお返答の内容がほぼ同じであり、大きな違いのないことで、担任・帰国生徒担当者をはじめ、教師の帰国生徒への対応マニュアルが定着している。ただ、対応しているにもかかわらず不安が述べられているのは、不安解消のためには（事柄によるが）時間がかかることも事実である。アンケートのお返答の中の事柄についても時とともに少しずつ解決されていることもある。しかし学習関係の悩みは、結果がついてくるまでは、すぐには解消されない、というところもある。

今年度の回答結果も例年とはほぼ同じであるが、回答数の多い項目について挙げておく。（回答は保護者・生徒15組得ることができた。）

生活面の悩みは、生徒・保護者ともに半数以上が「特になし」という答えである。悩みとして出された内容も大きな心配事はない。一方で、学習面は「特になし」は、生徒が6名、保護者が5名だけである。特に、授業より生徒個人での学習姿勢や学習

方法で悩んでいることが伺える。これまでの学習状態を変えていくことの難しさであろう。

本校に入学して良かったことは「友人の良さ・友人関係の良さ」が挙げられている。そして「教師の姿勢や学校の対応の良さ・教師と生徒の関係の良さ」「校風の良さ」が挙げられている。

混合受け入れ方式については、入学時に語学力の維持について多少の要望があるものの、生徒、保護者の間ではともに、制度そのものについては賛成意見が多い。

入試方法については、「学科試験がなくて良かった」と書かれている一方で、「ついていけるかが不安」という回答が多い。学科試験を課さないことが、地域によっては十分に日本の教育情報が入らない地域や授業の進度や内容の異なる地域からの受験生の心理的負担を軽減していることは評価できる。しかし小学校修了時の学力に関して、共通の診断を経ずに入学したことが入学後に埋めていかなければいけない知識量の差などの課題への不安にもつながっていると見える。

作文については、はっきり「いやだ」と回答しているのは生徒に2名、保護者で1名いるのみで、生徒も保護者も多くが「あった方がよい」と答えている。評価材料が提出書類と面接のみではなく、海外生活を通して子ども自信が得たものも加味されることを歓迎する向きが見られる。

VI 成果と課題

本校での帰国生徒の募集は、本年度をもって修了することになった。1年生から回収したアンケートの結果を見る範囲では、ほぼ例年通りであったといえる。入学時に生活面に関しては、毎日の通学の手段や経路についての不安、学習については漠然と一般入学枠での生徒との学力差を心配する記述が多いのに対し、1学期末の回答では、生活面・学習面ともに、具体的な項目が挙げられてきている。学校生活に慣れてきたことから、自分の得手不得手や生徒それぞれがぶつかる課題が見え始めてきたと言える。

生活面については、掃除やことばに対する感覚、

や言葉づかいについて、また友人関係のことなど、帰国生徒特有のものではなく、非帰国生徒らも抱えている悩み、不安も挙げられていた。学習面についても、1学期末の回答には、学力診断テスト、日々の授業、2回の定期考査を通して、漢字や設問の意味がわからないなど、日本語に慣れていないことから起こる問題や勉強方法についてなど、具体的なものが書かれている。生活面・学習面とも夏休み、2学期以降にも帰国生徒というとらえ方ではなく、担当者と担任で連絡を取りながら指導していくことが改めて大切なことであるといえる。

本校の帰国生徒指導の特徴でもある混合受け入れ方式についても、例年通り肯定的な意見、感想が多かった。同じクラスで同じ授業を受け、体験を共有することで、自然な形で適応させていくことを期待し、本校ではこのスタイルを続けてきた。帰国生徒が他の生徒達に影響を与えていることも、アンケートからうかがえ、本校で期待している相互に切磋琢磨していくこともその成果としてあげられてる。

来年度以降は、帰国生徒として入学枠はなくなるため、今年度までの対応のしかたとは若干異なってはくが、今後も小学校時代を海外で過ごした生徒の受け入れは続いていく。これまでの調査・研究を踏まえ、担任・教科担当者を中心に今後も丁寧な指導をしていくことが求められると言える。

2008年4月 入学時アンケート（不安や心配なこと）のまとめ

生徒	保護者
<p>○なし（9） →2, 3日たったところで、友達もできて楽しい。</p>	<p>○なし（4） →楽しそうに通学している。 友だちができて喜んでいる。 少しずつ慣れて、中学校生活を楽しみにしている。</p>
<p><生活での不安・質問> ○クラスの人と仲良くできるか不安である。（2） ○友だちができるかどうか心配である。（2）</p>	<p><生活での不安・質問> ○友達と仲良くできるか心配である。（3） ○電車の乗り方，交通ルールが外国と違うので心配である。（2） ○帰国スケジュールの都合上，家族がまだ揃わない状態である。（1） ○慣れない環境や電車通学にまだ緊張感があるようだ。（1）</p>
<p><学習についての不安> ○理科・社会が不安である。（1） ○学力差のことが気になる。（1） ○日本語（国語）が苦手である。（1） ○漢字が書けない。（2）</p>	<p><学習についての不安・質問> ○学習の習慣（予習・復習）がついていない。（1） ○授業について行けるのか不安である。（2） ○日本語の語彙が少ない。（1） ○帰国生でない生徒達についていけるか，志望する高校に進学できる力をつけられるか心配である。（2） ○理科と社会が心配である。（2） ○日本の教育事情（絶対評価・観点別評価など）についてわからない。（1） ○英語力を維持できるか。（1）</p>
<p>生徒・保護者とも 15名回答</p>	<p><その他> ○保護者同士での知り合いがないので，不安である。（1）</p>

資料2 アンケートのまとめ② <1年1学期末>

- ・対象：2008年度帰国生徒入学生15名および、保護者15名
(A地域：6人 B地域：7人 C地域：2人)
- ・回答：自由記述方式(1人複数回答あり)
- ・表中のA, B, Cは地域を表す

1 本校での生活, 学習に対する戸惑いや悩み

<生活>

	生徒			保護者		
	A	B	C	A	B	C
・特になし	5	5		4	5	
・人見知りする性格で、親しい友人ができない	1		1	1		1
・掃除の仕方がよくわからない		1				
・通学時の混雑が辛そう					1	
・日本とアメリカとでは言葉のニュアンスが違う					1	
・現地ではキャスター付き鞆, リュックだったので鞆が重く感じられる			1			1
・言葉のニュアンスの違いがある					1	

<学習>

・特になし	2	3	1	3	2	
・学習内容が質量ともに増し、どのようにこなしてよいのか戸惑っている					2	1
・宿題が少ないため勉強方法に戸惑っている	1				1	
・国語の問題の意味がわからない		1				
・理科社会の学習が難しい	1	2	1	1	1	1
・まわりの人に比べてテストの点数が悪い		2			1	
・勉強についていけるかが不安である	2					
・漢字が覚えられない		1				

2 本校に入学してよかったと思うこと

	生徒			保護者		
	A	B	C	A	B	C
・素晴らしい学習環境, 質の高い教育に恵まれている				2	6	1
・子どもの学習意欲が出てきた	1				1	
・多くの友達ができる	3	6		2	2	1
・早寝早起きの習慣がついた					1	
・時間を気にして行動できるようになった					1	
・帰国生が何人かいる		1	1			
・帰国生担当の先生がいて心強い			1		1	
・通学距離が短い					1	
・様々な特技や能力の高い友達の中で学校生活を送れる				1		

・学校が楽しい	2					1
・授業が充実している	2			2		
・先生にわからないことが気軽に聞ける	1	1				
・特別扱いされない	1			1		
・勉強がはかどる		1				
・教育に熱心である				2		

3 海外で在学した学校で経験した、良かったと思う生活スタイル、学習スタイル

<生活スタイル>

	生徒			保護者		
	A	B	C	A	B	C
・日本人学校の小学部と中学部の子どもたち全員が協力的に活動したり、面倒を見たりしていた					2	
・教師と子どもとの関係がアメリカンスクールではフランク、ブリティッシュスクールでは厳格だった						1
・教室移動が少なかった			1		1	
・カフェテリアの給食システムが充実していた					1	
・スクールバスによる送迎があった		2	1	1		
・日本全国から派遣される先生と学べた					1	
・のんびりと生活ができた				1	1	
・ボランティア活動で責任を持たせている					1	
・徹底して子どもの長所を伸ばしていた					1	
・年に2回の面談でいろいろと相談することができた					1	
・スナックタイムがあって授業中におなかがすくことがなかった		1				
・異学年での宿泊行事で連帯感が育成された						1
・教育熱心な家庭が多かった				1		
・先生と外国語で会話ができた	2					
・国際交流が盛んだった				1		
・イベントが多かった	1					
・自由な校風だった		1				
・早寝早起きが身についた				1		

<学習スタイル>

・現地校との交流があった		2		1	2	
・現地のスポーツ選手による指導があった					1	
・ESLの授業が毎日行われた	1				1	
・各種の検定試験があった					1	
・少人数でレベルに合わせた授業が行われていた						2
・定期テストがなく普段の小テストで成績が決まった			1			
・レポート作成が低学年から徹底されていた					1	

・チャンスは平等に与えられていた						1
・実験が多かった		1				
・授業の中でディスカッションが多く取り入れられていた		1				1
・中国語の授業があった		1		1		
・漢字の宿題があった	1					
・先生が熱心だった				1		
・丁寧に教えてくれた	1					
・設備や備品が充実していた				1		
・考えることにたくさんの時間をくれた	1	1				
・個人の到達度を重視していた						1
・自ら学ぶことを重視していた						1
・校外学習が多かった		1				1

4 帰国生徒だけの学級で学ぶのと、本校のように他の生徒と同じ学級で学ぶのとどちらがよいか？

	生徒			保護者		
	A	B	C	A	B	C
・他の生徒と同じ学級がよい 理由) ほかの子どもの影響を受けることができる 小学校で帰国子女だけのクラスを経験しているから 同じ学級で学ぶのであればそれに合わせた選考が必要である 実際の社会では特別扱いされない	5	6		6	6	2
・まだわからない		1			1	
・無回答	1		2			

5 本校の帰国生徒以外の友達と学習したり生活して感じたこと、影響されたこと

	生徒			保護者		
	A	B	C	A	B	C
・とくになし	2	2	1		1	
・学習意欲が高い生徒が多く、意識が向上している	3	3		3	3	
・自分の意見を持っている生徒が多いと感じている				1		
・色々な友達とふれ合い、助けてもらっている		2			1	
・小学校よりも勉強が難しくなり、勉強時間が増えた	1					
・日本は自然が少ないので、息苦しい		1				
・当初勉強を自主的にしていたが、テレビを多く見るようになった				1		
・帰国生以外の生徒は、年相応の知識を持っているように感じられる				1		
・学習面・生活面共により影響をうけている				1	2	1
・学校生活が楽しい		1				
・自分から話題作りをするようになった		1				
・周りの生徒と学力差が大きいと感じた			1			1

6 帰国生徒以外の友達に影響を与えたのでは、と思うこと

	生徒			保護者		
	A	B	C	A	B	C
・なし	3	4	1	3	2	1
・世界を身近に感じることに役立った					1	
・英語（他言語）での自己紹介や文化についての発言ができる	1		1	1	2	1
・わからない教科を教え合うことで、助け合う気持ちが育ってきている					1	
・リーダーシップを発揮している					1	
・みんなにポジティブと言われる		1				
・帰国生徒特有の純粋な心を持っている				1		
・外国で身につけた文化面での力がある	1			1		
・海外での生活経験がある		1				
・違いを受け入れる力がある				1		

7 海外で身につけた自分（お子さん）のよいところ

	生徒			保護者		
	A	B	C	A	B	C
・授業中のおしゃべりが少ない		1				
・活かして欲しいことはあるが、将来のことであると思う					1	
・日常英会話・英語力（外国語力）がある	3	3		2		
・特定の友達ばかりでなく、誰とでも仲良くできる	2	2		1		
・一年中水泳ができる環境だったので、上達できた	1					
・人前での発表する力がつき、はっきりものを言う					2	
・約束を守る					1	
・平等・差別について理解できるようになった	1			1	1	1
・日本以外の文化を学べ、興味関心を持つようになった	2	2		1	3	
・色々なお稽古ごとを経験し、力を伸ばすことができた		1		1		
・意欲的・前向きな姿勢がある		1			1	
・笑顔がつけれる		1				
・新しい環境への適応力がある		1		2	1	
・愛国心がある				1		
・純粋な気持ちで友達と接することができる				1	1	1
・細かいところにこだわらない	1					1
・広い視野を持っている					1	
・動物・小さな子の面倒を見る愛情がある					1	
・ボランティア精神がある						1
・外国人に対して社交的である			1			
・挨拶をする			1			1
・日本の贅沢な生活が海外から見ると特別であると知っている						1

8 海外で（帰国後しばらくは）あった自分（お子さん）の良いところで最近変わったと思うところ

	生徒			保護者		
	A	B	C	A	B	C
<ul style="list-style-type: none"> ・英語（他言語）がもっと話せた・使えた ・自然の大切さを忘れてしまっているようだ ・疲れ切って笑顔がない ・起床・就寝時間が遅くなった ・部活動のない日はもてあましている（放課後の過ごし方） ・読書をしなくなってきた ・言葉遣いが悪くなってきた ・生活などにとまどうことが多いが、徐々に落ち着いてきている ・以前はムードメーカーだったのに、自己表現できず、遠慮している ・海外ではゆったりとしていたが、忙しく、イライラするようになった ・なし 	1	1				
		1			1	
					1	
				1		
				1	1	
	1					
					1	
						1
			1			
	3	4	1	5	3	

9 海外生活を経験したことで、今の生活や学習で困ったと感じること

	生徒			保護者		
	A	B	C	A	B	C
<ul style="list-style-type: none"> ・周りの常識，漢字や都道府県をあまり知らないことがある ・日本人学校に通っているときは，その住んでいる所からバスが出ていたために，一人で遅れるということはなかったが，今は電車と都バスで通学しているため遅れる可能性があり，少し心配である ・強いて言うなら，同窓会が開きにくい ・別れを辛くしないために，友達とあまり深く付き合わないようになってしまった ・海外に出てからなぜか牛乳嫌いになり，カルシウム不足だった ・日本の国語の勉強が遅れている ・オランダ語と英語が混ざってしまう，日本語がききとりにくい ・アメリカでは授業間に間食の時間があつたが，今はないので，3～4時間目あたりに空腹になる ・日本のテレビやビデオを好んでみていた ・生活面では特に感じないが，学習面では今後感じていくことがあるかもしれない ・バックが重く，電車通学なので登下校で疲れてしまう ・野外での自由な遊びのスタイルや，徒歩による移動は現地では制限されていたこと，また高地であったこと，生徒数も少ないため，体育自体があまり活発なものでなく基礎体力づくりには弊害となったと感じる ・屋外の行動は安全のために，大人に守られている状況であったため，逆に自分から行動することへの躊躇があるようだ ・勉強に関しては，比較的楽な環境で過ごしてきたことで，じっくり考える 	1		1			
	1					
				1		
				1		
					1	
		1				
						1
						1
			1			
						1
						1

習慣や予習復習の習慣が身に付いていない点だと思う					
--------------------------	--	--	--	--	--

10 その他、学校生活全般で感じたり、考えたりしていること

	生徒			保護者		
	A	B	C	A	B	C
・今の学校が楽しい。楽しく学校生活を送れる。	1				1	
・勉強が大変。自分にあった学習法を見つけない	1				1	
・環境がよい（普段の生活から、学習、部活動に至るまで年齢相応で、充実した学校生活を送れる。先生方がよく指導をしている。スクールカウンセラーがいる。）		1		1	2	
・ペットボトルを持ってこれないのが不便である		1				
・いまのクラスで仲良くしている友人には、出身小学校が異なるさまざまな生徒がいて、帰国生の背景を受け入れてくれる友達に囲まれ、特別扱いされず、とても本人らしく生活できているととてもうれしく思っている		1			2	
・竹早中に入学できてうれしい					1	

11 地域別募集の入試制度について感じる事

	生徒			保護者		
	A	B	C	A	B	C
・募集範囲が広く、いろいろな地域・環境で育ったの子どもがいてよい	2			1		
・地域によって、習っていることや生活していたことも違うと思うのでよい	1				1	
・人数がちょうどよいのでいい、とても良いと思う	1	1				
・日本の教育が受けにくい地域・現地校での受験体制の整っていない地域からの受験生にとっては心理的不安が軽くなってよい、公平性を感じる。	1			2		
・帰国枠という本来の帰国生を採るという主旨にあったものだと感じた				1		
・多様性を認め合い、尊重するという方針が実践されていると感じる		1		1		
・よくわからない／入試の意味がないと思う		2				
・適切だと思う。主に親の理由で世界各地で勉強してきた子ども達をバランスよく色々な国や地域から入学させるという点で意味があると思う				1	1	1
・色々な地域別で生活している子ども達と同じ中学校で学びお互いに刺激を与えて、世界観を広げられる、また仲良くなれるのは楽しく、よいと思う	1	4			2	
・学校が担っている役割や方針であり、特におかしいとは思わない					1	
						1

12 作文のある入試制度について感じる事

	生徒			保護者		
	A	B	C	A	B	C
<賛成意見>						
・海外で学んだことや感じたことが伝えられるものだからよい	1	1				
・小学校の時から作文が好きだったのでがんばれそうな気がした	1					
・国語の学習の時に、作文を経験していたのでうまく書くことができた	1					

・学科試験と比べて楽である，勉強が苦手だった私にとってよかった	1	1	1		
・日本語能力のみならず，学力だけでは測ることのできない人間性や経験から学習したこと，基礎能力や感性を判断するには作文というのは最も有効であると思う		1	3	1	2
・作文は，高校入試でも必要になると思うので，いい体験だと思う		1			
・日本人小学校に通っている子どもには，経験上不利なのかと思った					1
・作文のために，いろいろな題で練習をし，長い海外生活を振り返る，良い機会となっただけでなく，漢字や言葉の意味を勉強する方法にもなり，改めて作文の大切さを感じた。			1	1	
・作文にしぼれていたので，集中でき，試験の前に作文の練習をしたおかげでうまくなれたと思った。楽しかった	2	1			
<要望>					
・字数をふやしてもらいたい。好きな題名でかかせてもらいたい	1	1			
<反対意見等>					
・苦手だったので，いやだった。作文で合否が大きく変わるのではと不安	1	1			1
・帰国生の試験なのに，どうして作文なのか不思議だった					1

1.3 学科試験の無い入試制度について感じること

	生徒			保護者		
	A	B	C	A	B	C
<ない方がよいとする意見>						
・国語や算数のように，解答が決まっているものではなく，作文のように自由に表現できるものがよい	1					
・集中して作文に取り組むことができた	1	1				
・我が家としては，受験しやすかった 特になくてもいい				1	1	
・机上の理論だけではなく，本質をみてもらえる学校に対しての信頼感を持つことができる				1		
・学習内容や進度は国によって異なり，滞在国によって条件的に有利，不利が出にくいので，作文だけでよいと思う。	1	1	1	1		
・勉強が苦手だったのでよかった，安心した，国語算数はあると大変である	2	3				
・受験前は合格できるかもという期待，合格して嬉しい気持ちがあった。入学してからの他のお子さんとの学力の差で，ついて行けるか心配だった				1	1	
・学科試験があった場合，その勉強，準備のために帰国の時期を早めるなど，考えなければいけなかったが，学科試験がなかったために受験の直前に帰国した。自然な形で試験を受けることができたので，とてもよかった					1	
・学科試験がないことによってまわりとの学力の差が大きくなると心配したが，このことにより学校に学科試験なしで入れるのはとても良いと思った		1				
<あった方がよいとする意見・その他>						
・それぞれの知識を得ることは重要なことで，やはり国語と算数は大事な学科で，選抜の基準や試験への適性もわからないので，あったほうがよい		2			1	

・本当に、入学後についていけるのか一抹の不安はあったが、過去の経験から、現地での成績や、日本での成績を評価して、ついていけるかどうか、判断いただきたいものと考えている					1
・入学後に他の生徒との学力の差が顕著で本人も困ることがあるのであれば学科試験と作文の併用による選抜でも良いと思う					1

資料3

第1回帰国生徒保護者会記録

平成20年4月25日実施

出席者：第1学年帰国保護者 15名

帰国生徒委員会教員 4名

1学年主任

1. 校長挨拶
2. 担当教員紹介（帰国生徒委員、第1学年主任）
3. 保護者自己紹介
4. 本校の帰国生徒教育の方針について（松津）

(1)本校の帰国生徒教育の方針

- ・混合受け入れ方式をとり、帰国生徒のための学級や授業を設けない。特別に補習授業を行うこともない。
- ・学校としてはできるだけ自然な形でとけ込み、相互啓発していくことを期待している。

(2)個人面談について

入学後、2週間たったところで、4人で個別に面談を行った。どの生徒もクラスで仲のよい友達ができ、楽しく学校に通っているようである。学校の様子がわかり、リズムがつかめるまでは難しいところもあると思うが、順調にスタートできている。

(3)アンケートについて

①生徒たちの心配・不安について

生活面について

- ・友人関係での不安は解消されたようで、クラス集団にとけ込んでいるようだ。
- ・通学時に満員電車で乗らなければいけないこと、また重いカバンを持って通学することがまだ大変なところもあるようであるが、子どもたちなりに工夫しながら適応しようとしている。中学時代に体もこれから成長し、

体力もついてくるので、少しずつ解消されてくる。

学習面について

- ・社会・理科など教科によって心配がある、また漢字がわからない、などいくつか出てきた。各教科とも、小学校の内容の復習をしながら進めていくので、心配せずに授業をしっかりと聴いて、心配な教科があれば、教科担当者に相談に行くといよい。

②保護者の方から

生活面について

- ・東京地区またお住まいの地区の交通事情にもこれから少しずつ慣れていく。またバスや電車の経路なども生活しているうちに覚えていく。

学習について

- ・家庭学習は授業の復習を中心に短時間で集中して毎日続け、学習の習慣を身につけることが大切であるが、何よりも生活に慣れることが最優先である。
- ・日本語の語彙が少ない、日本語に慣れていないということについては、本や中学生向けの新聞を読むなどして、日本語の文に慣れるとよい。また生活をとおして身につけていく、いわゆる自然習得もあるので、長い目で見てほしい。
- ・小学校卒業時点での習熟度の高い生徒もいるが、これから同じ授業を受けて、家庭学習をしっかりとしていけば十分ついて行ける。1年生の前期くらいまでは、場合によっては、日本の小学校で学ぶべきことを知らないがためにハンディとなることが多少はあるかもしれないが、同じ授業を受けて、しっかりと復習すれば、取り戻すことは十分可能である。2年

から3年かかることもあると考えて、焦らず大きな気持ちで見守ってもらいたい。大人が考えている以上に子どもには適応力もある。

- ・英語力の維持については、本校では特に行っていない。いろいろな英会話学校などを含め、団体があるが中学生というよりは大人向けのものがほとんどである。

(4)その他

- ・帰国生徒の保護者の場合、どうしても知り合いが保護者の中にいないケースが多い。今回と7月にもう一度帰国生徒保護者会があるので、ぜひみなさんで同じ学年の帰国生徒の保護者ということで、情報交換するなどのネットワークを作り、2学期以降も仲良くおつきあいがあればと考えている。またこの後に、学年の保護者会のクラス懇談でPTAの役員を決めるが、卒業生の帰国生徒の保護者の方で、PTAの役員をして、仲のよい保護者の方が増えたと話していた方もいるので、そういった機会をぜひ利用してほしい。

(5)学力テストについて

日本の小学校課程の内容がどれだけ身についているかを診断し、今後の学習に役立てる。中学での評価等には一切関係ない。適切なアドバイスをするための資料とする。

(6)今後の予定

7月の1年生保護者会の日に合わせて集まる。卒業生の保護者の方のお話を聴く予定である。この第2回の保護者会が、帰国生徒保護者会の最終回になるが、その後も何かあった場合は個別に対応していく。

5. クラス別懇談

各クラスの保護者(3~4人)と面談担当教員1人でフリートークの形式で行った。保護者同士の情報交換、入学後に行った個人面談の報告、保護者からの疑問点についてアドバイスなどを行った。

資料4

第2回 帰国生徒保護者会記録

平成16年7月5日実施

出席者：第1学年帰国保護者 14名
帰国卒業生徒保護者 2名
(54期 Fさん, 59期 Oさん)
帰国生徒委員会教員 4名
1学年主任

1 帰国卒業生保護者のお話

(1)Fさん

- ・アフリカのガーナに3年間在住し、インターナショナルスクールといっても、ほぼ現地校のような学校に在学した。
- ・6年生のときに日本に帰国したが、学習面で遅れがちだった。
- ・中学では、英語以外の教科は、かなりできない状況であった。ただし、英語も文法では得点ができなかった。このケースは大学受験において不利であるから、中学校での文法をしっかりとやる必要がある。
- ・中学、高校の6年間で、テニス部に在籍した。
- ・東京という地理的感覚がなかったため、校外学習帰りの新宿駅内で迷うことがあったり、はじめの頃は満員電車で慣れていなかった。
- ・あまり先のことを気にせず、そのときどきの学校生活に一生懸命に取り組むとよい。結果は後からついてくるものである。
- ・英語以外の言語を在留先で身につけたお子さんも、第2外国語を大切に、伸ばしてあげてほしい。

(2)Oさん

- ・小学校から6年間、アメリカに滞在
- ・受験校を選ぶ際に、本人に負担がないように考えて、竹早中学校を選び、入学した。
- ・英語の力はあったので、帰国後も英語力を維持するために、帰国子女財団で運営している語学

の補助的な役割をしている教室に通った。

- ・現在、都立高校に入学している
- ・帰国後に英検準1級を取得している。英語力が落ちる前に、語学の資格を取ることを薦める。
- ・はじめの頃は、電車通学が慣れなかったので、始めは親がつきそって通学した。

<親として感じたこととして>

- ・滞在年数の倍をかけて日本の文化に慣れるという位の心構えでいてほしい
- ・帰国生の親同士の交流を続けていくとよい。
- ・教員とのコミュニケーションを取って、積極的に質問をするとよい。
- ・アメリカだったらね・・・という愚痴を言わないようにし、前向きな態度で子供と接したい

<質問・感想と返答>

- ・そのときどきの生活を大切にすることが印象に残った。先のことを考えがちだが、自分の足下をみてしっかりとしていきたい。

(質問)

- ・社会や理科に対するフォローをどのようにやってきたのか

(解答)

- ・理科が特にひどかったが、学校の勉強をしっかりするようにという対応をした。
- ・子供は通信教育で自学し、親としての声かけはよくがんばっているねという程度にとどめた。

2. 1学期を振り返って

学年主任より

- ・構えすぎないことが大切である。
- ・日本の地理的な内容は、白地図を書くなどの学習をするとよい。
- ・家と学校での態度を使い分けられる年齢なので、家であまりきちっとしていることの方が心配する必要があるかもしれない。
- ・教員を積極的に活用してほしい。

学習面について (松津)

中間考査明けに、最初に実施した学力テストの

結果を、コメントをつけて返却した。普段の学校の授業と併せて、長期的な学習目標としてアドバイスやコメントを参考にしてほしい。数字で結果が記されているが、あくまでも現在の状況として考えてもらいたい。得意な分野と苦手な分野はその生徒にもあると思うが、何をしたらよいかということを考えることが大切である。

中学1年生のこの時期は、小学生から中学生への過渡期でもあり、まだ大人のサポートを必要としている子どももいる。まだ個人差があり、必要があれば、夏休みぐらまでは子どもの学習状況を時々見ていくとよい場合もある。しかし、いずれにしてもお子さん自身が自分からわからないところを先生に質問したり、勉強の仕方を相談したり、やがては自分から行動できるようになることが、中学生として大切なことである。自分で問題解決できるようになる発達段階である。

どの生徒も学校や、通学には慣れてきているようなので、少しずつでよいので、学習の習慣をこれからつけていってほしい。具体的には、まずは毎日の授業の復習、そして予習をするように指示されている教科は予習もして授業に臨むことが大切である。苦手を克服するための継続的な学習をできるようになるとよい。毎日漢字の練習をするとか、計算問題に取り組む、英語のラジオ講座を聴くなど短時間でできることでよい。子どもからそのような話が出てこなければ教科担当の方へ相談するとよい。

生活面について

どの生徒も、学校になじみ、楽しく通学しているようで何よりである。通勤経路にも慣れ、学校生活そのものにも慣れてきているので、今後も健康には気をつけて中学校生活を送ってもらいたい。

3. 学期期末アンケートのお願い

出願時の提出書類に書いていただいたものと重なる項目もあるが、調査研究のため改めてご協力願いたい。7月15日(火)にご提出のこと。

4. 保護者からの質疑と応答

質問：日本語のキャッチアップについて、また日本語の細かいニュアンスをどのように習得したらよいか。

回答

- ・高校の現代社会の授業での「お宮参り」ということばがわからなかったことがあったが、今でもフォローアップできていないというのが実情である。こうすればよいという特効薬はないのではないか。本を読んで、日本語に慣れる、またそこから使い方を学ぶことが必要ではないか。
- ・NHKの週刊こどもニュースなどの番組では、一般のニュースで話題になっているようなことを、わかりやすいことばで説明しているので、録画して見てみるのはどうか。
- ・小石川図書館もあるので、利用できると思う。図書室を利用していることを褒めてあげてほしい。

引用・参考文献

- 1) 竹内 博 他
「帰国生徒の生活適応適応について」
東京学芸大学附属竹早中学校研究紀要、
第18号、 pp.99～111 1978
- 2) 佐々木 棟明 他 「帰国子女教育
—教育の対象化の視座から—」
東京学芸大学教育学部附属竹早中学校研究紀要、
第34号、 pp.137～167 1995
- 3) 林 正太 他 「1996年度混合受け入れ方式による
帰国子女教育の現状と展望
～帰国生のアンケート集計から～」
東京学芸大学教育学部附属竹早中学校研究紀要、
第35号、 pp.54～101 1996
- 4) 林 正太 他 「度混合受け入れ方式による
帰国子女教育の現状 ～平成9年度入学生の
アンケート集計から～」
東京学芸大学教育学部附属竹早中学校研究紀要、
第36号、 pp.79～102 1996
- 5) 林 正太 他 「度混合受け入れ方式による
帰国子女教育の現状 —地域別選抜で入学した
在留地域別にみる生徒の実態（初年度）—」
東京学芸大学教育学部附属竹早中学校研究紀要、
第36号、 pp.79～102 1996
- 6) 山村 喬子他「混合受け入れ方式による帰国生
徒教育の実践報告」（2002年度）
東京学芸大学教育学部附属竹早中学校研究紀要、
第41号 pp.31～72, 2002
- 7) 赤荻 顕子 他 「混合受け入れ方式による
帰国生徒教育の実践報告（2004年度）」
東京学芸大学教育学部附属竹早中学校研究紀要、
第43号 pp.19～44, 2004
- 8) 加々美 勝久 他
『異文化をわたる子どもたちへの支援』
～孤軍奮闘から全項体、そして
ネットワークへ～
お茶の水女子大学附属中学校
第6回 帰国子女教育研究協議会 資料 2008

混合受け入れ方式による帰国生徒指導：竹早マニユア

学校行事	帰国委員	クラス担任	教科担任	備考 (内容・留意点など)
4月	<p><1年次></p> <p>入学式</p> <p>オリエンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「帰国生徒在籍者資料」作成と教員への配布 ・入学時アンケート実施 ・学力確認テスト実施 ・採点結果を生徒に連絡 	<ul style="list-style-type: none"> ・結果を確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・テスト採点 ・学力判断のコメント添付 	<ul style="list-style-type: none"> ・内容は、在留国名・在留年数・学校種別 ・入学時の不安や学校への要望など (対象：帰国生、保護者) ・成績ではなく、現在の学力で不足している部分があるかどうかを確認するものであることを説明、家庭に持ち帰って各自で行い、提出してもらう ・生徒に戻し、自分の力を確認してもらう ・結果によっては、教科担任の指導を受けることを勧める ・入学時のアンケートと学力確認テストの結果を踏まえて、入学後1か月たった現在の状況を聞く 友人関係・学級や学校生活・部活動・学習などについて ・担当教員と保護者の顔合わせをして、今後の相談などがしやすいように本校の帰国生への指導のあり方を理解してもらう
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回帰国生保護者会実施 ・第1回帰国生保護者会実施 ・帰国生担当者の紹介・保護者同士の自己紹介・本校のソフトランディング指導について) ・個人カード作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・面談結果を報告 	<ul style="list-style-type: none"> ・面談結果の中で学習関係について報告 	<ul style="list-style-type: none"> ・内容によって、クラス担任・養護教諭へ連絡
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・個人カードに結果を記入 ・第2回生徒面談実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・学年保護者会 (含帰国生) 実施 ・結果を生徒に連絡 	<ul style="list-style-type: none"> ・随時、個人別学習アドバイス ・調査実施・採点 ・結果を担任へ報告 	<ul style="list-style-type: none"> ・結果によって、答案用紙を持って教科担任のところへ行くことを勧める ・帰国生の悩みについて職員会議で報告し、共通理解を持つ
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・個人カードに結果を記入 ・成績会議で帰国生の状況を報告 ・第2回帰国生保護者会実施 ・意識調査を実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・面談結果を報告 ・クラス生徒面談実施 ・結果を生徒に連絡 ・成績会議で帰国生の成績状況を報告 ・保護者面談 	<ul style="list-style-type: none"> ・面談結果の中で学習関係について報告 ・随時、個人別学習アドバイス ・調査実施・採点 ・結果を担任へ報告 	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス担任がクラス全員に行う面談で、帰国生だけのものではない ・面談結果のまとめの報告 ・帰国生卒業生の保護者2名による「竹早中学校時代の不安・悩み・その解決方法・よかったこと・卒業してからのこと」の話 ・その後、懇談 ・ほぼ1学期を過ごしたところで、生活・学習・学校などについて記述式のアンケートに答えてもらう (対象：帰国生、保護者) ・場合によっては3者面談で、1学期過ごした状況を把握し、アドバイスをする
8月				

月					<ul style="list-style-type: none"> 自由研究が夏休みの課題である（帰国生だけでなく在校生全員）この課題は、概ね帰国生の得意とするところ、特性を生かせるところである
	<ul style="list-style-type: none"> 調査結果をまとめ、過去の調査結果とも比較検討する 	<ul style="list-style-type: none"> 2学期以降は、できるだけ帰国生を一般生と区別した面談などの指導は行わないようにしていく ただし、授業などで帰国生の特性を生かした場面は大いに活用し、一般生との相互啓発を促すように努める 教員側は、帰国生の状況把握を念頭に置き、生活面・学習面ともに観察し、個人票への記録や成績会議などでの指導者間の連絡・報告を密に行っていく 保護者面談は希望に応じて行う 保護者会も、特に必要な場合がなければ帰国生だけの保護者会は行わない つまり、帰国生を特別視することなく、且つ常に支援できるような体制をとる 			
9月	教育実地研究	<ul style="list-style-type: none"> 意識調査結果の報告（必要事項のみ） 調査結果内容の必要事項を個人カードに記入 			<ul style="list-style-type: none"> 個人面談が必要と思われる場合は、適切な担当者が行う
10月	教育実地研究				
11月	文化研究発表会				
12月	期末考査	<ul style="list-style-type: none"> 個人カードに結果を記入 ← 個人カードに結果を記入 ← 成績会議で帰国生の状況を報告 ← 成績会議で帰国生の成績状況を報告 ← 保護者会実施 	<ul style="list-style-type: none"> 結果を生徒に連絡 ← 結果を生徒に連絡 ← 成績会議で帰国生の成績状況を報告 ← 保護者会実施 	<ul style="list-style-type: none"> 調査実施・採点 結果を担当へ報告 調査実施・採点 結果を担当へ報告 	
1月	本校入試				
2月	期末考査	<ul style="list-style-type: none"> 個人カードに結果を記入 ← 成績会議で帰国生の状況を報告 ← 成績会議で帰国生の成績状況を報告 ← 保護者会実施 	<ul style="list-style-type: none"> 結果を生徒に連絡 ← 成績会議で帰国生の成績状況を報告 ← 保護者会実施 	<ul style="list-style-type: none"> 調査実施・採点 結果を担当へ報告 	<ul style="list-style-type: none"> 1年間の中学校生活を終えて、生活と学習の状況についてのアンケートをとり、適応の状況を知る 春休み中に集計、まとめる
3月	卒業式	<ul style="list-style-type: none"> 年度末アンケート実施 年度末アンケートまとめ 			
		<ul style="list-style-type: none"> 中間・期末考査の結果を、個人カードに記入する等、適応状況に留意するが、生徒たちには感じさせないようにする 概ね、2年次に同じ 			
	受驗				<ul style="list-style-type: none"> 帰国後3年を経過しても、帰国生の資格で受驗できる高校もある
	卒業式	<ul style="list-style-type: none"> 卒業時アンケート実施 卒業時アンケートまとめ 			<ul style="list-style-type: none"> 3年間の竹早中学校生活を振り返って、感想を書いてもらう 春休み中に集計、まとめる